

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点 (短期経営目標)	
「学校教育目標」(長期目標) 自他を尊重し 自ら学ぶ 子どもの育成 「目指す子ども像」 ・意欲的に学び、チャレンジする子ども ・お互いを大切にし、思いやりのある子ども ・心身を鍛え、粘り強くやり抜く子ども		○ICTの活用が進み、教職員と児童の活用スキルがさらに高まった。 ○不登校傾向の児童への心理的な安心や居場所の確保、保護者との連携を大切にすることができた。前向きに成長する児童が増えた。 ○特別活動の異年齢活動などを活用し協調性・自制心・やり抜く力などが身につけてきている。 △基礎学力、特に国語の力に大きな課題がある △コロナ禍の影響による落ち込んだ体力面での課題は、改善に至っていない。		「学校教育目標」 自立力と自律力を育て 違いを知り認め合い チャレンジする子どもの育成 ・自立と自律に向けた基礎的な確かな力の育成 ・違いを認め合い協力しあう心の醸成 ・精神的安全性を確保しチャレンジできる環境づくりの推進	
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題 (自己評価)	学校関係者評価	
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画	1 これまで培ってきた授業づくりを大切にしながら、自己調整学習(自由進度学習)を進める。 2 探究的な学習を推進する。	・学習支援アプリを1週間に一度以上、家庭学習で活用する。 ・文章で振り返りをさせる学習場面を多くする。学習を振り返ることでメタ認知能力を高める。 ・探究的な学習活動の充実のため、それぞれの過程で児童の創造的な活動を取り入れ、保障していく。	○ICT活用を進め、家庭学習を含め全学年で自分の課題に合わせた学習を導入することができた。 ○文章表現による振り返りを多くの学習場面で取り入れることができた。(ICT・特別活動) ○社会科、生活科、総合的な学習の時間などで地域人材を活用し探究的な学習を進めることができた。 △ICT、探究共に今年度は導入段階にとどまった。 △ICT活用が学びに直結する研究がさらに必要。	○ICTを活用した学びは、これからの時代に必要である。積極的に活用してほしい。 ○ICT活用と同時に、従来の読み書きの教育活動も充実させていくことが大切である。続けて指導をしてほしい。	
	1 丁寧なアセスメントと個に応じた支援により、児童に寄り添った指導を行う。 2 いじめなどの未然防止のため積極的な生徒指導の充実に努める。	・個と集団のアセスメントをもとに、安心できる居場所づくりを行う。 ・無理に適応させるのではなく、人とつながりをもつことから社会性を育む。 ・担任だけでなく、いろいろな教員で複数の目ももちながら積極的に児童にかかわり、変化を見逃さず、安心できる居場所づくりに努める。 ・保護者との連携を大切にす。	○不登校児童出現を0にとどめることができた。 ○一部教科担任制、学年合同授業を導入することで、複数体制で児童を見ることができた。また、個に応じた指導、支援ができた。 ○悪い連絡だけでなく良い連絡も積極的に行うなど、保護者対応を丁寧に行うことができた。 △保健室登校児童の居場所づくりが保健室のみとなった。 △一部教科担任制だけでは支援が不十分であった。	○いじめ問題が心配である。学校内ではないが、社会体育などでのいじめや嫌がらせによる退会希望などを耳にする。学校内で影響がないわけではないだろう。しっかりと見てほしい。 ○落ち着いて学習に向かっている様子が見られる。今後も安定的な学校運営をしてほしい。	

健康・安全	<ol style="list-style-type: none"> 1 児童、保護者に対するの食育を充実させる。 2 児童の体力向上と心身の健康に対する意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食を中心に、食や望ましい生活習慣などの健康に関する情報を毎日発信し、保護者の意識を高める。 ・体育的行事等に向け、PDCA サイクルによる目標に向けて自己管理をする。 ・健康観察をはじめ、日々の児童の変化について交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○Instagramによる食育の発信を毎日行った。 ○自己調整、自己決定の場を設けることで、プレッシャーを感じる児童が少なくなった。 ○流行性疾病に対して早めの対応を行うことができ、学級閉鎖が4学級にとどまった。 △食育の発信内容はどのような発信をするのか、更に研究することが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○積極的な情報発信はこれからの時代必要である。保護者のライフスタイルに合わせて発信方法を工夫するのは大切である。
(A)特色ある学校づくり	<ol style="list-style-type: none"> 1 これまでの特別活動の研究実践をもとに、各教科、領域での活動にその成果を生かしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別活動での自己実現、自己評価をもとにメタ認知能力の向上を目指し、中学年以上の児童に PDCA サイクルで自己管理をさせる。 ・低学年では自己調整学習（自由進度学習）を進めていくための基礎的な力を付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自己実現などのメタ認知育成に関する教職員による個別の研究を進めることができた。 ○特別活動を中心に PDCA サイクルによる自己管理を行い、準備や運営を進めることができた。 ○△低学年での自己調整学習に備える力の育成には学習規律が不可欠であることを確認できたことは成果となるが、自ら学習を進める力については明確な成果を上げることができていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもたちの思いや考えをしっかりと受け止めて授業をしてほしい。 ○自分たちで考えて活動していくことは社会に出てから大切になってくる。今後もそういう場を学校が用意し経験させてもらいたい。
(B)研修	<ol style="list-style-type: none"> 1 校内研究では各教員の興味関心を基に自らをマネジメントしながら研究を進め、成果をまとめることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究アプローチだけでなく、研究内容に関しても各教員の興味関心にゆだねる。 ・丁寧な中間評価を何度も行い、研究の価値づけを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○校内研究では各教員の興味関心による研究アプローチがなされ成果を上げた。 ○京都教育大学や京都府教育委員会からの支援を受け、研究の伴走指導をしていただく中で、本校児童のもつ力の価値付けと研究の方向性について助言をいただいた。 △教員一人一人の研究であったため、客観的視点による評価の弱さが見られた。 △研究での成果を指導に落とし込んでいるのかどうかの検証が不十分である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校外からの知見による研究は大変有効である。独りよがりになりやすく、より高い効果が期待される。
次年度に向けた改善の方向性	<p>来年度も同じ学校教育目標を掲げ教育を推進していく。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 学校のブランド化を進める。「児童が学びたい、保護者・地域が行かせたい、教職員が働きたい」学校づくり（学校教育目標「あい言葉」の具現化、チーム担任制導入・自己決定の場の設定、教職員の研究・研修の推進、ベトナムの小学校との国際交流、海外語学研修教職員派遣、漢字検定等の導入、低学年生活科のカリキュラム改革） 2 互いを知り合い、認め合う学校づくりを進める（人権教育の推進）。 3 ICT活用と従来の学習方法による学びの両方を推進（両方を大切にしながら学年、学習内容などによってすみ分けていく）。 4 非認知能力とメタ認知研究の研究推進（教科授業などを通じた研究）。 5 教職員の生徒指導力の向上（いじめ、SNS、不登校等） 			<ul style="list-style-type: none"> ○社会の変容に合わせて学校も変わっていかねばならないところもあるが、大切にしてほしい部分もある。バランスを取りながら頑張してほしい。